



## Kobe Shoin Women's University Repository

Title	日本語のアスペクトと反実仮想 Japanese Aspects and Counterfactuals
Author(s)	郡司 隆男 GUNJI Takao
<i>Citation</i>	Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin, No.7 : 21-34
Issue Date	2004
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

# 日本語のアスペクトと反実仮想\*

郡司 隆男

## Japanese Aspects and Counterfactuals

GUNJI Takao

### Abstract

This article presents a formal analysis of the Japanese aspectual morpheme *-tei* and its relationship to counterfactual expressions involving *-tara* and *-reba*. I will argue, following our former analysis in Igarashi and Gunji (1998) and revising it, that verbs and the affix *te* can take at most two aspectual views, which gives at most four combinations of aspectual views. I will show that three of them, except for the progressive view, have similarity in that they take the entire event as a whole in what I call the DEGENERATE form, which is argued to give the appropriate view suitable for counterfactuals.

本稿は、日本語のアスペクト辞「～てい」の形式的分析を示し、それと、「～たら」「～れば」を伴う反実仮想表現との関連を論じる。Igarashi and Gunji (1998) に示した以前の分析を再整理し、動詞と接辞「て」がそれぞれ最大2つの「視野」をとり得ることから、最大4つの視野の組み合わせが可能であることを示す。そして、これらのうち、進行の視野を除く3つが、事象を、「縮退」と呼ぶ形で全体的に捉えるという共通性をもつことから、それが反実仮想にふさわしい視野を与えることを論じる。

### 1. はじめに

日本語の一般の条件文には、「～たら」「～れば」「～なら」などの形がある。

- (1) a. 明日主催者が和服を着たら、パーティは盛りあがるだろう。
- b. 明日主催者が和服を着れば、パーティは盛りあがるだろう。

\*本研究の一部は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究 (A) 「日常的推論の論理と言語形式: 量化表現、条件文、モーダル表現を中心として」(平成 15 年度～平成 18 年度、研究代表者: 郡司 隆男、課題番号 15202009) を受けている。

c. 明日主催者が和服を着 { る / た } なら、パーティは盛りあがるだろう。

これらのうち、(1c)では、「る / た」は時制をあらわし、非過去 / 過去の時制を伴う動詞に「なら」が接続する。一方、「着たら」の形は、「\*着るら」と交替しないことからわかるように、時制を伴わず、「た」は過去の時制ではない。「着れば」に時制が含まれないことも明らかである。

過去に実現しなかった事態を想定する反実仮想は、これらの形のうち、時制を伴わない、「～たら」「～れば」の形か、「～たなら」の形を用いて表現される。<sup>1</sup> 次の(3a)は少し不自然な言い方だが、(3b)よりは容認性が高いと思われる。(3b)は(3c)の「着るなら」よりは容認性が高いと思われるが、(2a)には劣る。

- (3) a. あのととき主催者が和服を着たら、パーティは盛りあがっただろう。  
 b. ?あのととき主催者が和服を着れば、パーティは盛りあがっただろう。  
 c. あのととき主催者が和服を着 { \*る / た } なら、パーティは盛りあがっただろう。

実際には、過去の実際に起こらなかった事実を仮定する反実仮想に対しては、(3a)よりは、次のように「着ていたら / 着ていれば」を用いた方が、文としても自然である。<sup>2</sup>

- (4) a. あのととき主催者が和服を着ていたら、パーティは盛りあがっただろう。  
 b. あのととき主催者が和服を着ていたら、パーティは盛りあがっていただろう。  
 c. あのととき主催者が和服を着ていれば、パーティは盛りあがっただろう。  
 d. あのととき主催者が和服を着ていれば、パーティは盛りあがっていただろう。  
 e. \*あのととき主催者が和服を着ているなら、パーティは盛りあがっただろう。

(4b, d)に見るように、「テイ」形は、前提部だけでなく、帰結部にも用いることができる。

しかし、このような「テイ」形を単純な未来の仮定をあらわす場合に用いると不自然になる。(1)と次を比較されたい。

- (5) a. ?明日主催者が和服を着ていたら、パーティは盛りあがるだろう。  
 b. ?明日主催者が和服を着ていれば、パーティは盛りあがるだろう。  
 c. \*明日主催者が和服を着ているなら、パーティは盛りあがるだろう。

未来の事象に「テイ」形を用いると、自然さが増すどころか、容認度が落ちるように思われる。少なくとも、(5a, b)は(3a)とは異なった状況を叙述していると言えるだろう。<sup>3</sup>

<sup>1</sup>ともに条件文を作る「たら」と「れば」に意味の違いがあるかどうかは明らかでない。「たら」にある次のような用法は「れば」にはないと思われる。

- (2) a. 和服を着たら気持ちが引き締まった。  
 b. ?和服を着れば気持ちが引き締まった。

前者は一回限りの出来事にも使えるが後者は繰り返し起こった出来事にしか使えないように思える。

本稿で問題とする条件文の例文には、このような意味の違いは出てこないので、両方を同じように扱う。さらなる議論は田雀(1993)などを参照。

<sup>2</sup>以下、「～ている」「～ていた」形を総称して「テイ」形と呼ぶ。

<sup>3</sup>(5a, b)は(3a)とは異なり、着用中であつたら、という意味あいをもつ。(3a)にもそのような解釈はあるが、着用状態が終了してしまった後の状況をも記述し得る。

一方、(4)と同様に、現在の事実と反する仮想の場合にも、「テイ」形を用いる方が自然である。

- (6) a. 今ここで主催者が和服を着ていたら、パーティは盛りあがるだろう。  
 b. 今ここで主催者が和服を着ていたら、パーティは盛りあがって{iる/た}だろう。  
 c. 今ここで主催者が和服を着ていれば、パーティは盛りあがるだろう。  
 d. 今ここで主催者が和服を着ていれば、パーティは盛りあがって{iる/た}だろう。  
 e. ?今ここで主催者が和服を着たら、パーティは盛りあがるだろう。

ここでも、(6b, d)に見るように、帰結部で、現在の（事実とは異なる）状況の描写に「テイ」形が用いられることに注意されたい。

本稿では、反実仮想文で用いられる「テイ」形の意味を「テイ」の形式的な分析から導くことを目的とする。筆者らは、先に、Igarashi and Gunji (1998) で、日本語の「テイ」形に見られる3つ（実際には4つ）の用法が「視野」(view)という考え方をを用いて、導き出されることを示した。本稿では、その分析に基づいて、反実仮想の「～ていたら/～ていれば」の用法を明らかにする。

以下では、まず、Igarashi and Gunji (1998) の分析のうち、本稿の議論に関係するところを再整理して示し、その上で、日本語の反実仮想の問題を考える。

## 2. 日本語の「テイ」形の意味

日本語の「テイ」形には、一見異なる次のような用法がある。

- (7) a. 主催者は今一所懸命和服を着ている。 (進行)  
 b. 主催者は朝からずっと和服を着ている。 (結果)  
 c. 主催者は3年前にも一度和服を着ている。 (経験)

ここで「経験」と便宜的に呼ぶ用法は、何も、経験する主体がなければならないということではない。例えば、次のような無生物主語でも同じような用法がある。

- (8) この堤防は3年前にも一度決壊している。

この用法は、後に見るように、出来事を全体としてとらえる用法であり、反実仮想と関係の深い用法なのである。

Igarashi and Gunji (1998) では、このような用法を、各々の動詞のもつ「視野」(view)と「て」という接辞のもつ「視野」の組み合わせから導くことを主張した。以下では、「視野」という概念を、Igarashi and Gunji (1998) を再整理しながら示すことにする。

## 2.1 語彙素のもつ時間特性

まず、「着る」のような動詞の語彙素 (lexeme) には、行為開始時点 ( $s$ )、行為完了時点兼状態開始時点 ( $f$ )、状態終了時点 ( $r$ ) の3つの時点の組が定義されていると考える。<sup>4</sup> 当然ながら、これらの時点の間には次のような制約がある。

$$(9) \quad [\text{TEMP } \langle s, f, r \rangle] \quad \text{ただし、} s \leq f \leq r$$

さらに、不等号が等号の場合、 $f$  や  $r$  が定義される場合・されない場合 ( $f = \infty$ 、 $r = \infty$  のように表記する) などの可能性を考えると、論理的には次のような可能性がある。

$$(10) \quad \begin{array}{ll} \text{a. } s < f: & [+activity] \qquad s = f: \quad [-activity] \\ \text{b. } f < \infty: & [+definite] \qquad f = \pm\infty: \quad [-definite] \\ \text{c. } f < r: & [+transitional] \qquad f = r: \quad [-transitional] \\ \text{d. } r < \infty: & [+recoverable] \qquad r = \infty: \quad [-recoverable] \end{array}$$

ここで、 $s < f$  は、行為開始時点と行為完了時点との間に一定の時間が経っていることをあらわし、Vendler (1967) の分類で言うところの *activity* に属する事象に対応する。一方、 $s = f$  であれば、行為開始時点と行為完了時点とが同じであり、行為は瞬間的に完了する。これは *achievement* である。<sup>5</sup>

$f < \infty$  は、有限時間内に行為が完了することを示す。 $f = \infty$  の場合には、行為が永久に完了しない。 $f < r$  は、行為完了時点に状態変化が起こることをあらわす。 $f = r$  の場合には、状態変化がなく、行為完了時点がそのまま状態終了時点となる。一方、 $r < \infty$  は、有限時間内に行為前の状態に復帰することを示す。 $r = \infty$  の場合には、行為開始後の状態がそのまま永久に保たれる。

以下では、(10) に示した2値素性を用いて、 $s < f$  であるかないかを  $[\pm activity]$  で、 $f < r$  であるかないかを  $[\pm transitional]$  で、 $f < \infty$  であるかないかを  $[\pm definite]$  で、 $r < \infty$  であるかないかを  $[\pm recoverable]$  であらわすことにする。

$[\pm recoverable]$  ( $r < \infty$ ) な場合には、 $f \leq r < \infty$  より、 $f < \infty$  が言えるので、 $[\pm definite]$  になる。また、 $[\pm transitional]$  ( $f < r$ ) な場合にも、 $r$  の値に関わりなく、 $f < \infty$  となるので、 $[\pm definite]$  になる。<sup>6</sup> さらに、 $[-recoverable]$  ( $r = \infty$ ) かつ  $[-transitional]$  ( $f = r$ ) の場合には、 $f = \infty$  となるので、 $[-definite]$  である。

すなわち、素性値の間に次のような制約が成り立つ。

$$(11) \quad \begin{array}{l} \text{a. } [+recoverable] \rightarrow [+definite] \\ \text{b. } [+transitional] \rightarrow [+definite] \end{array}$$

<sup>4</sup>本稿では便宜上、 $s$ 、 $f$  に関して「行為」という言葉を用いるが、無生物主語の場合も合わせて考えるためには「事象」「事態」などの用語の方が適切かもしれない。ただし、これらの用語も、それぞれの専門的な定義をもって使われることがあるので、余計な混同を避けて、「行為」に統一する。

<sup>5</sup>Vendler (1967) では、*activity* と *achievement* の他に、*accomplishment* と *state* を設けている。ここでは、*accomplishment* も、 $s < f$  という性質は共通なので、*activity* の一種と考えることにする。また、本稿では、「テイ」形をもたない *state* は考察の対象としない。

<sup>6</sup> $f < \infty$  であっても、 $-\infty = f$  の場合には、 $[-definite]$  とする。

表 1: 語彙素の分類

	定義	activity	transitional	recoverable	definite
a. <i>Recoverable transitional activity</i>	$s < f < r < \infty$	+	+	+	+
	例: 着る、開ける				
b. <i>Nonrecoverable transitional activity</i>	$s < f < r = \infty$	+	+	-	+
	例: 暗記する				
c. <i>Nontransitional activity</i>	$s < f = r < \infty$	+	-	+	+
	例: 歩く、読む				
d. <i>Indefinite activity</i>	$s < f = r = \infty^-$	+	-	-	-
	例: 待つ、黙る				
e. <i>Recoverable transitional achievement</i>	$s = f < r < \infty$	-	+	+	+
	例: 座る、結婚する				
f. <i>Nonrecoverable transitional achievement</i>	$s = f < r = \infty^-$	-	+	-	+
	例: 死ぬ、腐る				
g. <i>Nontransitional achievement</i>	$s = f = r < \infty$	-	-	+	+
	例: 驚く、躓く				
h. <i>Indefinite achievement</i>	$-\infty = s = f < r = \infty$	-	+	-	-
	例: 似る、漂う				

## c. [-recoverable] &amp; [-transitional] → [-definite]

以上のような考察に基づき、Igarashi and Gunji (1998) では、動詞の語彙素（ここでは、proto-lexical item と呼んでいる）を表 1 に示す 8 種類に分類している。4 つの 2 値素性があるが、(11) の制約から、この 8 通りが論理的に可能なすべての組み合わせである。<sup>7</sup>

表 1 の a-d はいずれも、[+activity] の値をもち、一定の時間幅をもった行為 (activity) をあらわす。中でも、a, b は [+transitional] であり、状態変化を伴う。一方、e-h は [-activity] であり、瞬間的な行為 (achievement) をあらわす。これらにも、[±transitional] によって状態変化を伴うものと伴わないものがある。<sup>8</sup>

<sup>7</sup> 正確には、素性値の可能な組み合わせとしては、[-activity, -transitional -recoverable] が考えられるが、各素性の定義から、これは  $s = f = r = \infty$  となり、決してはじまらない行為をあらわすことになり、そのような事象を言語化することはないと思われる。したがって、言語化されるのは、a-g の 7 通りである。h については後述参照。Igarashi and Gunji (1998) では、c を definite activity、g を definite achievement としていたが、ここでは、それぞれ、nontransitional activity、nontransitional achievement と呼ぶことにする。

<sup>8</sup> 表 1 にあげた例はあくまでも、筆者の語感に基づくものであり、例えば、「結婚する」や「死ぬ」事象が recoverable であるかないかに関しては判断に個人差があるかもしれない。また、意味的に同じ語彙素であっても、

これらのうち、*h* の *indefinite achievement* は、素性値の指定においては *f* の *nonrecoverable transitional achievement* とほぼ同じである。違いは、前者においては、行為開始時点 (= 行為完了時点) が不定であり ( $-\infty$  であらわしてある)、いつはじまりいつ終わったかがわからない事態をあらわす。これは特殊な例であり、金田一 (1976) の言うところの「第4種の動詞」に対応する。<sup>9</sup>

## 2.2 語のもつ時間特性

Sag, Wasow, and Bender (2003), Sag and Wasow (1999) などの語彙主義に立つ文法理論では、語彙素がそのまま文の中で用いられるのではなく、一定の語彙規則によって語 (word) に変換された後に文中のしかるべき位置を占めると仮定されている。本稿でもこの考え方に従い、*s*、*f*、*r* によって区別される時間の一部を使用することを指定するような語彙規則があって、語としてはそのようにして切り出された一定の視野 (view) の範囲内を記述すると考える。

実際、日本語の動詞がこのような使われ方をすることは次のような例から確認することができる。「着る」のような、*recoverable transitional activity* の動詞には、異なる3つの時点が定義されているが、これらのすべてを含む言い方はなく、次のように、その一部のみを問題にする。

- (12) a. 主催者は毎日3時間かけて和服を着{る/た}。 (進行)  
 b. 主催者は毎日3時間だけ和服を着{る/た}。 (結果)  
 c. 主催者は3年前に1度だけ和服を着{\*る/た}。 (経験)

これらは、それぞれ、(7) の3つの用法に対応した「ル/タ」形の言い方である。<sup>10</sup> これらの用法は「テイ」形とは独立に動詞そのものもっている用法であることになる。

いわゆる進行においては、*s* と *f* の間が問題にされている。すなわち、視野の始点は *s* であり、終点は *f* である。この視野を基本視野 (basic view) と呼ぶ。一方、結果においては、行為の完了時点 *f* から変化した状態が元に戻る時点 *r* までが問題とされる。この場合、*s* から *f* の間に何が合ったかは問題とされず、言語使用者の認識上では一体化している。Igarashi and Gunji (1998) ではこれを縮約 (degeneration) と呼び、*sf* という記法であらわしている。この視野を状態視野 (stative view) と呼ぶ。<sup>11</sup> 以上を次のように、語彙

言語が違えば、言語集団として判断が異なることもあり得る。

また、*d* の *indefinite activity* と *f* の *nonrecoverable transitional achievement* において  $r = \infty^-$  としてあるのは、他の *nonrecoverable* の動詞と異なり、これらは、不定ではあるが、有限 (i.e.,  $\infty^- < \infty$ ) の時間内に行為が完了 (*d* の場合) したり、元の状態に復帰 (*f* の場合) したりする可能性がないとも限らないという筆者の判断を示している。Igarashi and Gunji (1998) では、このような不定性を *visibility* という用語で3段階にわたって区別しているが、本稿で扱う現象では、 $\infty^-$  と  $\infty$  の区別を設けるだけで十分である。このような区別は個々の動詞によって細かく違っている可能性もあり、例えば、「死ぬ」では  $r = \infty$  だが、「腐る」では  $r = \infty^-$  というような区別を設ける可能性もあるかもしれない。

<sup>9</sup>Vendler (1967) の分類に対して述べた注と同じく、本稿では、金田一 (1976) にある、4種の区別 (状態動詞、継続動詞、瞬間動詞、第4種) の中で、状態動詞は考察の対象としていない。継続動詞は *activity* に、瞬間動詞と第4種の動詞は *achievement* に対応する。

<sup>10</sup>ただし、「ル」形には、「タ」「テイ」形とは異なり、経験の用法はない。

<sup>11</sup>Igarashi and Gunji (1998) では *resultative view* と呼んでいる。

素がもつ時点素性 TEMP ( $s, f, r$  の3つの時点のリスト) と、語がもつ視野素性 VIEW (視野の始点と終点の対) の値との間の制約として、語彙規則の形で形式的に示すことにする。<sup>12</sup>

(13) a. 基本視野語彙規則:

$$\left[ \begin{array}{l} \text{lexeme} \\ \text{TEMP } \langle s, f, r \rangle \end{array} \right] \Rightarrow \left[ \begin{array}{l} \text{word} \\ \text{VIEW } \langle s, f \rangle \end{array} \right]$$

b. 状態視野語彙規則:

$$\left[ \begin{array}{l} \text{lexeme} \\ \text{TEMP } \langle s, f, r \rangle \end{array} \right] \Rightarrow \left[ \begin{array}{l} \text{word} \\ \text{VIEW } \langle sf, r \rangle \\ \text{DEGENERATE +} \end{array} \right] \quad \text{ただし, } sf = f < r^{13}$$

基本視野は、 $s = f$ 、つまり、幅のない視野であってもよいが、状態視野は一定の時間幅があることを前提とする。 $f < r$  であるのは、[+transitional] な動詞だけなので、状態視野をもつことができるのは、これらの動詞に限られることになる。

先の8種類の動詞がもち得る視野を整理すると表2のようになる。

### 2.3 「テイ」形の視野

Igarashi and Gunji (1998) で指摘したように、歴史的には、「て」は古典日本語の完了の助動詞「つ」の連用形に由来すると考えられている。すなわち、動詞の「テ」形は完了のアスペクトをあらわすのが基本である。しかし、形容詞の連用形、打消の助動詞「ず」、副詞に接続するなど、完了の助動詞「つ」の連用形としては考えられない用法があることも指摘されている(西田, 1971)。

現代日本語の「て」にも、何種類かの用法があるとされているが、「テイ」形の「て」については、元来「前件が後件に述べる事柄の内容について限定を加えたり、その場面・状況などを提示したりする関係にあることを表わす」用法であったものが後続の「い(る)」の部分を実質的意義を失い形式化したものとされている(倉持, 1971)。

これらの分析を踏まえて、Igarashi and Gunji (1998) では、「テイ」形を作る「～て」の異なる2つの用法は、視野  $\langle s, f \rangle$  をもつ動詞に接続して、それ自身が  $s$  と  $f$  の間に行為開始時点 ( $s'$ ) と行為完了時点 ( $f'$ ) をもつような語彙素として定義されていた。<sup>14</sup>

(14) 「て」

$$\left[ \begin{array}{l} \text{lexeme} \\ \text{ARG-ST } \left\langle \left[ \text{VIEW } \langle s, f \rangle \right] \right\rangle \\ \text{TEMP } \langle s', f', r' \rangle \end{array} \right]$$

<sup>12</sup>DEGENERATE という素性は、VIEW の始点が縮退したものであるかどうかを示す。後に見るように、反実仮想の「たら」「れば」は、この素性をもつ語を下位範疇化する。

<sup>13</sup>数学的には、 $sf$  と  $f$  との間に直接前後関係が定義されるのではなく、それぞれを時間軸上に投射した値の間に前後関係が定義されるとすべきだが、ここでは簡略化して表記している。 $sf = f$  という表記の意図するところは、言語使用者の認識においては、縮約した事態の時点はその完了時点をもって代用されるということである。

<sup>14</sup>Igarashi and Gunji (1998) では、 $\langle s, f \rangle$  は幅をもつ視野でなくてはならないとして、 $s < f$  という制約が課せられているが、この制約はおそらく不要なので、ここでは想定しない。

表 2: 可能な視野

例		基本視野	状態視野
a. <i>Recoverable transitional activity</i>	着る	定義: $s < f < r < \infty$	
	開ける	$\langle s, f \rangle$	$\langle sf, r \rangle$
b. <i>Nonrecoverable transitional activity</i>	暗記する	定義: $s < f < r = \infty$	
		$\langle s, f \rangle$	$\langle sf, \infty \rangle$
c. <i>Nontransitional activity</i>	歩く	定義: $s < f = r < \infty$	
	読む	$\langle s, f \rangle$	—
d. <i>Indefinite activity</i>	待つ	定義: $s < f = r = \infty^-$	
	黙る	$\langle s, \infty^- \rangle$	—
e. <i>Recoverable transitional achievement</i>	座る	定義: $s = f < r < \infty$	
	結婚する	$\langle s, s \rangle$	$\langle s, r \rangle$
f. <i>Nonrecoverable transitional achievement</i>	死ぬ	定義: $s = f < r = \infty^-$	
	腐る	$\langle s, s \rangle$	$\langle s, \infty^- \rangle$
g. <i>Nontransitional achievement</i>	驚く	定義: $s = f = r < \infty$	
	躓く	$\langle s, s \rangle$	—
h. <i>Indefinite achievement</i>	似る	定義: $-\infty = s = f < r = \infty$	
	漂う	—	$\langle -\infty, \infty \rangle$

ただし、 $s \leq s' \leq f' \leq f$

このような語彙素「て」が、他の動詞と同様の語彙規則を経て、2種類の視野をもつことになる。状態視野においてあらわれる状態終了時点( $r$ )は $s, f$ に(もし定義されていれば $r$ にも)依存しない。したがって、視野 $\langle s, f \rangle$ をもつ動詞に接続する「て」自身の視野は次のようになる。

(15) a. 基本視野の「て」:

$$\left[ \begin{array}{l} \text{word} \\ \text{ARG-ST} \left\langle \left[ \text{VIEW} \langle s, f \rangle \right] \right\rangle \\ \text{VIEW} \langle s', f' \rangle \end{array} \right]$$

ただし、 $s \leq s' \leq f' \leq f$

b. 状態視野の「て」:

word	
ARG-ST	$\langle [ \text{VIEW } \langle s, f \rangle ] \rangle$
VIEW	$\langle s'f', r' \rangle$
DEGENERATE +	

上の定義では、与えられた  $\langle s, f \rangle$  に対して、 $\langle s', f' \rangle$  がその間に入るというだけの制約しか課せられておらず、不定性が残るが、ここでは、無標の解釈は、 $\langle s', f' \rangle$  が最大区間をとる解釈であると仮定し、 $s' = s$ 、 $f' = f$  とする。

先に分類した8種類の動詞の中には基本視野と状態視野をとり得るものがある。これに「て」が接続した場合、可能な組み合わせとしては合計4種類の視野の組み合わせができることになる。例えば、「着る」の場合次のようになる。

- (16) a. 基本視野  $\langle s, f \rangle$  の「着る」+
- i 基本視野の「て」:  $\langle s, f \rangle$  (進行)
  - ii 状態視野の「て」:  $\langle sf, r' \rangle$  (経験 I)
- b. 状態視野  $\langle sf, r \rangle$  の「着る」+
- i 基本視野の「て」:  $\langle sf, r \rangle$  (結果)
  - ii 状態視野の「て」:  $\langle sfr, r' \rangle$  (経験 II)

これらのうち、(16a i) は「着て (いる)」のいわゆる進行の用法である。<sup>15</sup> また、(16b i) は「着て (いる)」の結果の用法に対応する。「て」が状態視野をとる (16a ii), (16b ii) は、どちらも、「着て (いる)」のいわゆる経験の用法に対応する。この2つの経験の用法の意味の差は微妙だが、(16a ii) の経験 (経験 I と呼ぶことにする) は、視野の起点の  $sf$  が着用行為の完了時点の  $f$  と同じであり、それ以後を問題にしていることから、「着用行為をしたことがある」という経験であり、(16b ii) の経験 (経験 II と呼ぶことにする) は、 $sfr$  が着用状態の終了時点の  $r$  以後であることから、「着用状態にあったことがある」という経験である。次のような文は、この微妙な違いをあらわしている。

- (17) a. 主催者は2時間前にこの部屋で3時間かけて和服を着ている。 (経験 I)  
 b. 主催者は2時間前にも一度和服を着ている。 (経験 II)

(17a) では、主催者はまだ和服を着ている可能性が高いが、(17b) では、すでに和服から着替えている可能性が高い。

先にあげた8種類の動詞に「て」を接続した場合の可能な視野とその用法を一覧にして表3に示す。bの nonrecoverable transitional activity の経験 II は、 $r = \infty$  であるため  $sfr = \infty$  なので、 $\langle \infty, r' \rangle$  という、決してはじまらない視野である。fの nonrecoverable

<sup>15</sup> 「着ている」の「いる」の部分は「い」と「る」に分かれ、「い」は、隣接する「〜て」の視野  $\langle s, f \rangle$  の  $s$  を行為開始時点とし、 $f$  を行為完了時点および状態終了時点とする、nontransitional activity の性質をもった語彙素であると仮定する。したがって、「〜てい (る)」には基本視野しか定義されず、それは隣接する「〜て」の視野、すなわち、(16) に表記されているもの、と同じものになる。

transitional achievement の経験 II の視野  $(\infty^-, r')$  についても同様に、ほとんどはじまることのない視野である。

いわゆる activity の動詞の場合には「テイ」形に進行と経験 I の用法があるが、achievement の動詞には進行の用法がなく、結果あるいは経験 I、II の用法しかないことがわかる。すなわち「座って」「死んで」には結果の用法と経験の用法、「驚いて」には経験の用法のみ、「似て」には結果の用法のみがある。

### 3. 「テイ」形と反実仮想

以上の「テイ」形に対する基本的性格付けを踏まえて、日本語の反実仮想における「テイ」形の意味を考えることにしよう。

まず、注意すべきは、反実仮想における「テイ」形は、いわゆる進行の用法をもたない、achievement の動詞についても可能だということである。

- (18) a. あのとき結婚してい{たら/れば}、今ごろは後悔せずに済んでいただろう。  
 b. あのとき死んでい{たら/れば}、この光景を目にすることはできなかった。  
 c. あのとき躓いてい{たら/れば}、死んでいたところだった。  
 d. この子が自分に似てい{たら/れば}、もっと嬉しかっただろう。

これらの動詞はすべて achievement の動詞であり、「テイ」形に進行の意味はない。結果ないし経験 II の意味があるだけである。

さらに、「テイ」形が進行の用法をもつ動詞であっても、反実仮想の文脈では進行の意味をもたない。<sup>16</sup>

- (19) a. あのとき主催者が和服を着てい{たら/れば}、パーティは盛りあがっただろう。(= (4a, c))  
 b. あのとき司会者が挨拶の文句を暗記してい{たら/れば}、参加者は感銘を受けただろう。  
 c. あのとき自分の足で歩いてい{たら/れば}、証拠を発見できただろう。  
 d. あのときあと 30 分待ってい{たら/れば}、彼に会えただろう。

反実仮想でない「～いたら」には進行の意味はあり得る。

- (20) a. あのとき主催者が別室で和服を着ていたら、突然パーティが始まってしまった。  
 b. あのとき司会者が挨拶の文句を暗記していたら、パーティが始まってしまった。

<sup>16</sup>反実仮想の文脈で進行の意味をもたせる手段がないわけではない。例えば「～しているところだったら」という形を用いる。

- (i) a. あのとき主催者が和服を着ているところだったら、パーティは台無しになっていただろう。  
 b. あのとき司会者が挨拶の文句を暗記しているところだったら、参加者は軽蔑していただろう。  
 c. あのとき自分の足で歩いているところだったら、車に乗りたいと思っただろう。  
 d. あのとき彼を待っているところだったら、気まずかっただろう。

これに関連した「～ところだ」の分析については Takubo (2003) を参照。

表 3: 「テイ」形の用法

	例	基本視野		状態視野	
		進行	経験 I	結果	経験 II
a. <i>Recoverable transitional activity</i>	着てい 開けてい	定義: $s < f < r < \infty$			
		$\langle s, f \rangle$		$\langle sf, r \rangle$	
		$\langle s, f \rangle$	$\langle sf, r' \rangle$	$\langle sf, r \rangle$	$\langle sfr, r' \rangle$
b. <i>Nonrecoverable transitional activity</i>	暗記してい	定義: $s < f < r = \infty$			
		$\langle s, f \rangle$		$\langle sf, \infty \rangle$	
		$\langle s, f \rangle$	$\langle sf, r' \rangle$	$\langle sf, \infty \rangle$	$\langle \infty, r' \rangle$
c. <i>Nontransitional activity</i>	歩いてい 読んでい	定義: $s < f = r < \infty$			
		$\langle s, f \rangle$		—	
		$\langle s, f \rangle$	$\langle sf, r' \rangle$	—	—
d. <i>Indefinite activity</i>	待ってい 黙ってい	定義: $s < f = r = \infty^-$			
		$\langle s, \infty^- \rangle$		—	
		$\langle s, \infty^- \rangle$	$\langle \infty^-, r' \rangle$	—	—
e. <i>Recoverable transitional achievement</i>	座ってい 結婚してい	定義: $s = f < r < \infty$			
		$\langle s, s \rangle$		$\langle s, r \rangle$	
		—	$\langle s, r' \rangle$	$\langle s, r \rangle$	$\langle sr, r' \rangle$
f. <i>Nonrecoverable transitional achievement</i>	死んでい 腐ってい	定義: $s = f < r = \infty^-$			
		$\langle s, s \rangle$		$\langle s, \infty^- \rangle$	
		—	$\langle s, r' \rangle$	$\langle s, \infty^- \rangle$	$\langle \infty^-, r' \rangle$
g. <i>Nontransitional achievement</i>	驚いてい 躓いてい	定義: $s = f = r < \infty$			
		$\langle s, s \rangle$		—	
		—	$\langle s, r' \rangle$	—	—
h. <i>Indefinite achievement</i>	似てい 漂ってい	定義: $-\infty = s = f < r = \infty$			
		—		$\langle -\infty, \infty \rangle$	
		—	—	$\langle -\infty, \infty \rangle$	—

- c. あのとき自分の足で歩いていたら、証拠が見つかった。  
 d. あのとき 30 分待っていたら、ようやく彼がやって来た。

したがって、反実仮想に特徴的なのは進行以外の「テイ」形の用法であり、表3で経験Ⅰ、結果、経験Ⅱとしてある用法である。これらはいずれも縮退した始点を伴う視野をもつという共通性がある。<sup>17</sup>したがって、反実仮想の「たら」「れば」は縮退した視野をもつ動詞を下位範疇化するとしてよいだろう。具体的には次のような語彙記述を与えることになる。

(21) 「たら」/「れば」

$$\left[ \begin{array}{l} \text{lexeme} \\ \text{ARG-ST} \left\langle \left[ \begin{array}{ll} \text{VIEW} & \langle s, f \rangle \\ \text{DEGENERATE} & + \end{array} \right] \right\rangle \\ \text{TEMP} \quad \langle s', f', r' \rangle \\ \text{ただし、} \quad s \leq s' \leq f' \leq f \end{array} \right]$$

c、d、g の、nontransitional な「歩いてい」「待ってい」「驚いてい」などには、結果、経験Ⅱの用法がないので、経験Ⅰの用法しかない。この場合「テイ」の解釈は経験Ⅰに一意に定まる。また、h の indefinite な「似る」などには結果の用法しかない。これらの「テイ」の解釈も一意に定まる。<sup>18</sup>

残る、a、b、e、f の動詞には経験と結果の両方の用法があるので、「テイ」形の意味には曖昧性があることになる。上の例文から該当するものを再掲すると次のようになる。

- (22) a. あのとき主催者が和服を着てい{たら/れば}、パーティは盛りあがっただろう。(= (19a))  
 b. あのとき司会者が挨拶の文句を暗記してい{たら/れば}、参加者は感銘を受けただろう。(= (19b))  
 c. あのとき結婚してい{たら/れば}、今ごろは後悔せずに済んでいただろう。(= (18a))  
 d. あのとき死んでい{たら/れば}、この光景を目にすることはできなかった。(= (18b))

(22a) では、「着てい」の視野として、 $\langle sf, r \rangle$  (結果)、 $\langle sf, r' \rangle$  (経験Ⅰ)、あるいは、 $\langle sfr, r' \rangle$  (経験Ⅱ) の可能性があるが、これらのうち、結果と経験Ⅰは視野の始点は同じである。つまり、行為の開始から完了までを縮退した形を見て、それ以降を問題にする。

<sup>17</sup>このような「テイ」形の用法について、Jacobsen (2002, p. 10) は、「テイ」形の状態性に注目し、“less vivid, more remote hypothetical interpretation” の効果があると述べているが、田窪 (1993) が、Jacobsen (1990) の同様の主張を批判して言うように、状態性と非現実性とは直接結びつくわけではなく、そのような結びつきは、「たら/れば」の条件文の中に限られるという点が捉えられていない。

<sup>18</sup>d の「待ってい」などは、そのままでは、経験Ⅰの視野が  $\langle \infty, r' \rangle$  という、ほとんどはじまらない視野であるが、(19d) では「30分」が「待ってい」に付くことによって、行為完了時点が確定した値になっている。すなわち、「30分待ってい」は実はcの nontransitional activity として振る舞っている。

結果の場合にはそれが元の状態に復帰する時点までに留まるが、経験Ⅰの場合は、それ以降の可能性もある。一方、経験Ⅱは行為の開始から、完了を経て、元の状態に復帰するまでを縮退した形で見て、それ以降を問題にする。つまり、結果の視野は元の状態に復帰するまでであり、経験Ⅱの視野は復帰後しか見ない。経験Ⅰはその中間であり、どちらともとれる。(22a)の場合、判断は微妙であるが、主催者が和服を着ている状態でパーティが盛りあがっていたらという可能性(結果)と、すでに和服から着替えてしまっていた後でパーティが盛りあがっていたらという可能性の両方があるように思える。

(22b)では、結果 $\langle sf, \infty \rangle$ と経験Ⅰ $\langle sf, r' \rangle$ は、 $r'$ の値が十分大きければ、実質的に同じものになり、経験Ⅱ $\langle \infty, r' \rangle$ は決してはじまらない視野なので、この場合には解釈は一通りしかない。暗記した状態が維持されている場面で参加者が感銘を受けるのである。(22c)に関しては、結果 $\langle s, r \rangle$ <sup>19</sup>の場合には視野が結婚後かつ離婚前であり、経験Ⅱ $\langle sr, r' \rangle$ では離婚後を問題にする。経験Ⅰはその中間である。このどの解釈もあり得るように思える。最後に(22d)では、(22b)と同様に、結果 $\langle s, \infty^- \rangle$ と経験Ⅰ $\langle s, r' \rangle$ は、 $r'$ 値が十分大きければ、実質的に同じものになり、経験Ⅱ $\langle \infty^-, r' \rangle$ はほとんどはじまらない視野であるので、やはり、実質的に解釈は一通りになる。

#### 4. おわりに

以上、様々なアスペクト特性をもった動詞の「テイ」形の意味を考察してきた。動詞によってとり得る視野が異なるので、すべてを一通りの括り方でまとめることはできないが、いわゆる進行以外の視野は、経験Ⅰ、Ⅱにせよ、結果にせよ、動詞側ないし「て」側で縮退の操作が起こっており、動詞によって記述される事態を全体的に捉え、そのようにして捉えた事態と一定の時点(動詞側の $r$ ないし「て」側の $r'$ )との間を問題にする用法であると言える。

日本語の反実仮想も、現実の事態とは離れたところに焦点をあてる言い方であることから、過去ないし現在の事態を、すでに完了したものとして全体として捉える見方に立っている。

このように、両者には事態の捉え方において共通点があり、反実仮想表現の中に「テイ」形が使われることに合理性があると言えるだろう。

また、以上の特性は「テイ」という、時制を含まない形ですべて決まるので、反実仮想では、「たら」「れば」という、時制を伴わない接続語が使われることも理解しやすい。時制を伴う「テイタ/テイル」形の分析を示している余裕はないので、Igarashi and Gunji (1998)の、時制の「ル/タ」についての形式的な分析を参照されたい。

なお、本稿ではstateの動詞を扱わなかったが、「～あつたら、～あれば」という言い方も同様に反実仮想の意味をもち得ることから、本稿の扱いに準じた扱いが可能であろう。すなわち、状態性の動詞は、「て」を伴わなくとも、いわば語彙的に縮退していて、表3のhの「似てい」の結果の視野 $\langle -\infty, \infty \rangle$ のような視野をもっていると考えれば、本稿の扱いをそのまま適用できるだろうと思われるが、詳細を詰めることは今後の課題と

<sup>19</sup>この視野の始点の $s$ は、実は、縮退した $sf$ の $s=f$ の場合である。

したい。また、本稿ではアスペクトの特性以外の反実仮定の意味論的分析は示さなかったが、これについては、先行研究として、田窪 (1993), Jacobsen (2002), Takubo (2003) などを参照されたい。

### 参考文献

- Igarashi, Yoshiyuki & Gunji, Takao (1998). The temporal system in Japanese. In Gunji, Takao & Hasida, Kôiti (Eds.), *Topics in Constraint-Based Grammar of Japanese*, pp. 81–97. Kluwer, Dordrecht.
- Jacobsen, Wesley M. (1990). The multifaceted character of stativity in Japanese. In Kamada, O. & Jacobsen, W.M. (Eds.), *On Japanese and How to Teach It*. The Japan Times, Tokyo.
- Jacobsen, Wesley M. (2002). On the interaction of temporal and modal meaning in Japanese conditionals. In Akatsuka, Noriko M. & Strauss, Susan (Eds.), *Japanese/Korean Linguistics*, Vol. 10, pp. 3–17. CSLI Publications, Stanford.
- 金田一春彦 (1976). 日本語動詞のテンスとアスペクト. 金田一春彦 (編), 『日本語動詞のアスペクト』. むぎ書房, 東京.
- 倉持保男 (1971). 「て」(現代語). 松村明 (編), 『日本文法大辞典』, pp. 506–510. 明治書院, 東京.
- 西田直敏 (1971). 「て」(古典語). 松村明 (編), 『日本文法大辞典』, pp. 502–506. 明治書院, 東京.
- Sag, Ivan A. & Wasow, Thomas (1999). *Syntactic Theory: A Formal Introduction*. No. 92 in CSLI Lecture Notes. CSLI Publications, Stanford. 郡司隆男・原田康也訳『統語論入門: 形式的アプローチ』, 岩波書店, 2001.
- Sag, Ivan A., Wasow, Thomas, & Bender, Emily (2003). *Syntactic Theory: A Formal Introduction, 2nd ed.* CSLI Publications, Stanford.
- 田窪行則 (1993). 談話管理理論から見た日本語の反事実条件文. 益岡隆志 (編), 『日本語の条件表現』, pp. 169–183. くろしお出版, 東京.
- Takubo, Yukinori (2003). Lexical polysemy and mapping among cognitive domains: The case of *tokoro-da* conditionals in Japanese. Paper presented at Japanese/Korean Linguistics 13, Michigan State University.
- Vendler, Zeno (1967). Verbs and Times. In *Linguistics in Philosophy*, pp. 97–121. Cornell University Press, Ithaca, New York.

**Author's E-mail Address:** gunji@sils.shoin.ac.jp

**Author's web site:** <http://sils.shoin.ac.jp/~gunji/>